

## さらなる発展を期待

坂 口 順 治

(日本社会事業大学大学院)

「人間はどこから来てどこへ行くのか。私という存在は一体何者なのか」  
ゴーガンではないが、人間は生きている限り存在の意味を問いつづける。

生涯学習は、存在の意味を問いかけながらオープンエンドの学びのよろこびを経験する。「なぜ」という思想と価値を求めながら、「いかに」という伝達と相互交流の経験によって、存在の意味を知ろうとする学習である。しかし、それはただちに完結するのではなく、人間が生きている限り続く永遠の課題であろう。オープンエンドの学習は、生きる力を燃焼し続ける学習のプロセスであり、その学習過程こそが生涯にわたって人間の命（いのち）と精神（こころ）のよろこびを体得する生涯学習の究極である。

いま、わが国は時代の転換期の真っ只中にある。政治も社会の動きも人間の生き方も何かしら地殻的変動の時期が来ている。

時代の転換期はものごとの本質を問いかけてくる。今という時代から原点を見直す機会である。表層に表れた問題の奥にあるほんとうの原因を見定めて、これまでの思い込みや先入観を払拭して自由になってこそ、時代の転換期を乗り越えていく力が湧いてくる。

わが学会が発足したのは1980年。それ以前からも準備はしていたが、もっとも大きな動機となったのは「時代の転換期」としての変革のエネルギーを感じとったからである。古い体質では行き詰まってしまいそうだ。何か新しい兆しがある。原点を見直してパラダイムの転換が必要ではないかという地

鳴りを感じとったからである。

学会の発足当初は、社会が変化しつつあっても既存の学問領域に固執した雰囲気が高い、学習は大人社会へ出る準備教育であるという固定観念や、世界の変貌に無頓着なアカデニズムが横行していた。こうした現状固着型の状況の下に、原点志向の意味を問い、教育実践者と行政関係者と研究者たちが領域の垣根を取り払って、統合的人間学習の活動を提唱したのが学会結成の動機である。

その思想的背景には、抜本的な教育改革を迫る生涯教育理念があった。当時の臨時教育審議会のメンバーたちが「生きる意味」の価値を考えながら実践する学習活動をつよく提案した。「なぜ」という存在の問いかけをもって価値を理解する教育が「いかに」という具体的な方法と直結した創造的な学習を提唱したのである。当時は生涯教育と言えば学校外教育の一環であって、従来の社会教育とは変わらなかったし、外装だけを塗り替えた官製社会教育などと揶揄的な批判もあったが、世界の動きを見据え未来を展望した上での、原点からの変革を迫ったのである。こうした創出努力が通底音になって2000年の「第3の教育改革」が実現したのである。

明治維新の近代的自我をめざす教育改革が第1次とするならば、第2次世界大戦後の六三制民主主義教育への改革に次いで、第3の教育改革は生涯学習への変革であり、わが学会の活動は現代の教育改革に先見的な貢献をしてきたといっても過言ではない。むしろ誇りに思っている。

「生きる力」という存在の意味を問いかける教育理念は、中教審（1996）の第1次答申にも明記されたように、生涯教育の理念のもとに学校教育の改革を明示した。総合学習プログラム、ボランティア学習、週5日制、絶対評価などの新しい方法は、個人の内在する自立心、自己抑制力、自己責任、共生と寛容の心、社会の調和と倫理性などを育むことに焦点を合わせたものである。

時代の転換期には何か新しい生き方や発想や技術が生じる。ダブルが指摘したようにグーテンベルグの印刷術の発明は、ヨーロッパの宗教改革や、市民社会の誕生につながった大変動であった。そして、印刷術は国民を一つにまとめる近代国家を形成する原動力になった。

同じように現代のIT革命は、国家を超えて市民と結びつき、グローバル化する世界を形成しつつ、個人の存在意義をさらに問いかけている。まさしく時代の転換期を感じさせる革新の力が胎動しているのである。

今、日本はIT革命によって経済的側面重視のグローバリズム、ユニタリズム、市場中心の拝金主義という動きがつよいが、それが究極のよりどころではないと感じはじめ、新しい社会的価値を見直しつつある。これは原点から今を問かける転換期の特徴である。

生涯教育の世界でも、教育委員会の改革、生涯学習関連行政のシステム改革、社会教育施設等への指定管理者制度の導入、PFIやNPM、自己点検、第3者評価の導入、高度情報化のインフラ整備、eラーニングの推進、専門職の能力向上のシステム改善など、新たなパラダイムの構築が目白押しである。これは転換期のエネルギーの発露である。

現在の課題は民営化、自律的運営、経営的教育展開という特徴がある。民営化はとりもなおさず国民負担の軽減をはかりながら、自主性の尊重と独自の経営、自由な発想でユニークな展開が期待される。経営的教育展開も、従来の枠組みにとらわれないで、他分野とのコラボレーションなどの多彩な展開が予想できる。それは人間がより強く生きるための具体的な計画である。

年報27号は「生涯学習推進のさらなる飛躍をめざして」という特集テーマである。まさしく今のこの時点にふさわしい主題である。「いまここ」での生涯学習の現場と人間教育の原点志向の問いかけの中から、歩むべき次のステップを指し示すビームのような先見性を示唆した年報の内容である。

転換期のうねりを感じながら、次の時代を予見する教育のあり方をわれわれ学会員はさらに努力して構築したい。それが学会の時代的使命である。